



常胤の孫が平家方を倒した合戦の地

^{しらはたじんじゃ}白幡神社の言い伝えによれば、はじめこの地には^{ゆうきいなり}結城稻荷がまつられていました。治^じ承4年(1180)、房総半島で再起した源頼朝が源氏の白旗を立てたことから、白幡(白旗)の名で呼ばれるようになったと伝えられています。

この地域はかつて^{ゆうき}結城と呼ばれていました。南北朝時代の『源平闘諍録』には、頼朝を迎えに出た千葉常胤の留守を突いた平家方の千田親正(政)を、孫の千葉成胤が結城の浜で迎え撃ち、千葉氏の守護神である^{みょうけん}妙見の助けを得て勝利したという伝承が見ら



『千葉妙見大縁起絵巻』落馬する千田親正(中央右)

れます。この合戦は、関東に

おける平家方の一角をくずした戦いと評価されています。戦国時代の『千学集抜粹』や『千葉妙見大縁起絵巻』には、^{ゆうきの}結城野に白旗20～30本を立てたとあり、このようなエピソードが白幡神社の呼び名の言い伝えにつながったと考えられます。

この付近には白旗の伝承のほか、常胤が頼朝を出迎えた^{きみまちばし}君待橋や頼朝に茶を献上したお茶の水など、千葉氏と頼朝に関する伝承が残っています。鎌倉幕府成立に至る物語のひとつに、地域の人々が思いをめぐらせていたことがうかがえます。



『千葉妙見大縁起絵巻』栄福寺蔵 非公開
攻めかかる千葉成胤(中央)の軍勢と妙見(左)